

中国新石器時代における編布圧痕の研究

——中国における民族考古学的調査・1——

渡 辺 誠

I. はじめに

織布以前の布が編布（アンギン）である。日本においては縄文時代前期からその存在が確認でき、織布が縄文晩期末に伝播した後も現代に到るまで存続している。織布同様編布も大陸より伝播したと推定されるが、民族資料にも考古資料にも類例がみられず、わずかに中国新石器時代早期の磁山文化にみられるにすぎない。しかしその報告書では編織紋と記されていて編布としての認識はない。したがって編布の系統を論じる前に、磁山文化における編布を同一基準において検討する必要性を痛感し、1994年9月に河北省文物研究所を訪問して調査をさせて頂いた。本稿はその調査報告である。

II. 磁山遺跡の編布圧痕

中国北部の新石器時代早期文化の研究は、近年急速に進展している。仰韶文化に先行するそれらには裴李崗文化・磁山文化・大地湾文化などがある。裴李崗文化は河南省中部、磁山文化は河北省南部、そして大地湾文化は陝西・甘肅省を中心に分布している（安志敏1985）。それらの時期はBC5000～5500年前後であり、縄文時代早期に並行する（第1図）。

編布の間接的資料である底部圧痕は、それらのうち磁山文化にのみみられる。それも標式遺跡である磁山遺跡以外には現段階では確認されていない。

磁山遺跡は河北省武安県磁山村に位置している。河岸段丘上に立地する初期農耕村落で、大量に粟が検出されている。

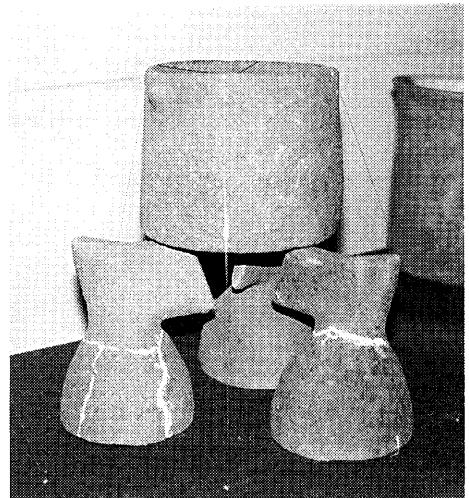
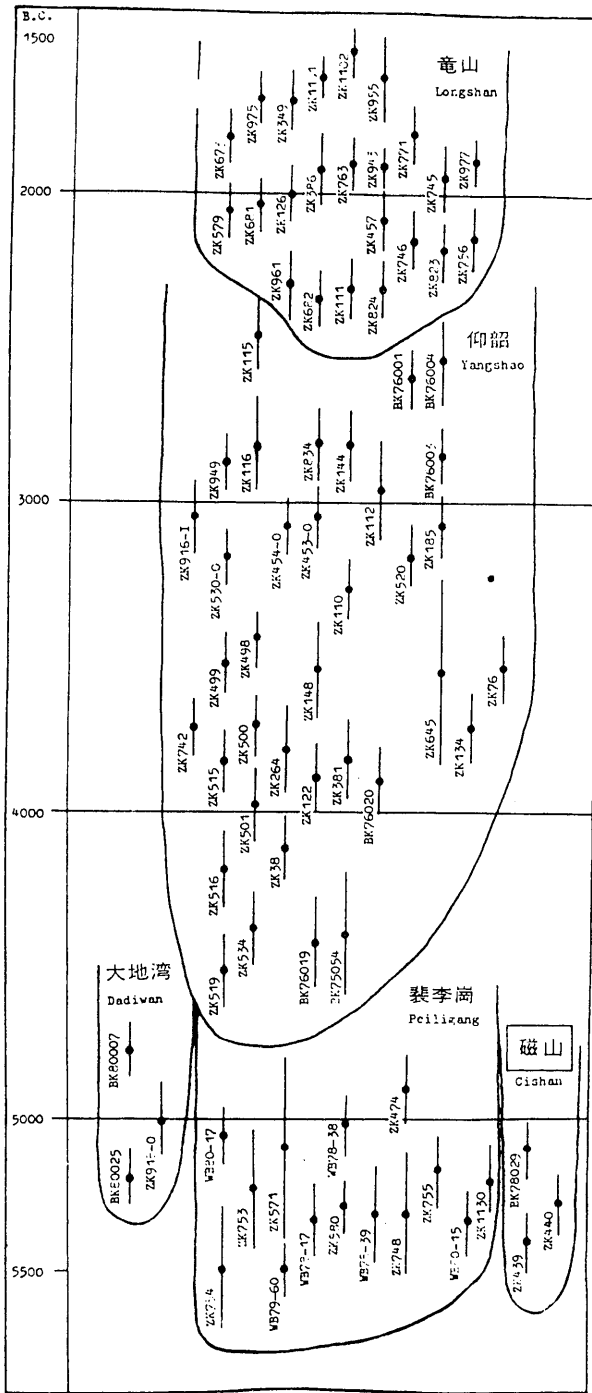


写真1 盃と支脚のセット

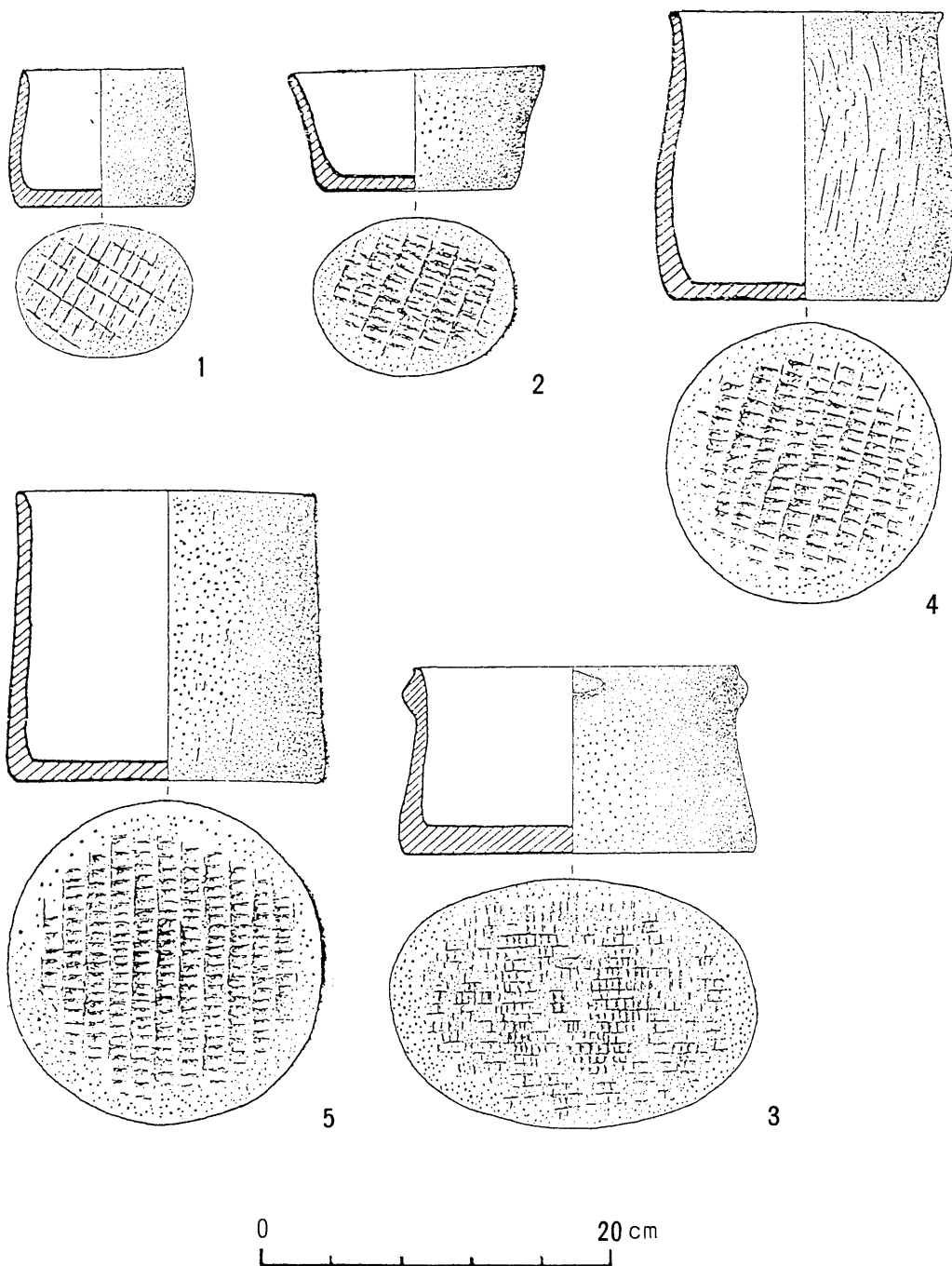


第1図 華北新石器時代のC14年代数値対照表 (安志敏1985より)

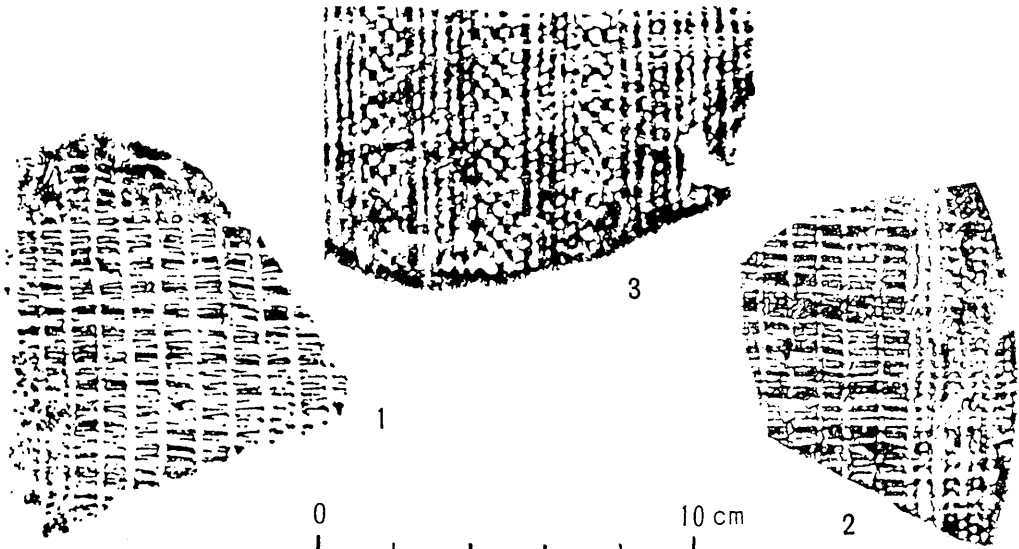
磁山遺跡は河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所によって、4次にわたって発掘調査が行われている。第1次は1976~77年、第2次は1985年、第3次は1988年、そして第4次は1994年である。ただしその報告は第1次調査についてのみ概報(邯鄲市他1977)・報告(河北省・邯鄲市1981)が発表されているにすぎない。今回筆者が調査の機会を与えられたのは、第1次調査発掘資料のごく一部分である。

土器の器形は盃と支脚が主であり、他は少ない。盃は筒形平底の器形で支脚とセットとなって使用される(写真1)。盃は高さの低い場合(第2図1~3)、底径との比率がほぼ等しい場合(同4・5)とに大別される。いずれにしろ並行期の繩文早期の土器が尖底で、圧痕の着くチャンスがないことは対照的である。また盃の平面形は円形ばかりでなく、楕円形の多いことも重要な特徴である(同1~3)。

盃は50%以上が無文であるが、繩文・編織文・篋文・付加堆文・剔刺文・劃文などの文様もみられる。それらの中では繩文がもっとも多く、編織文・篋文がこれに次ぐ。ただし編織文は底部にのみみられる。また編織文の組織自体についての記載はなく、わずかに5点の略図(第2図)と3点の拓影(第3図)のみである。しかしそれらは繩文土器の場合との



第2図 編織文付きの盃 (邯鄲市他1977より)



第3図 編布圧痕拓影 (河北省・邯鄲市1981より)

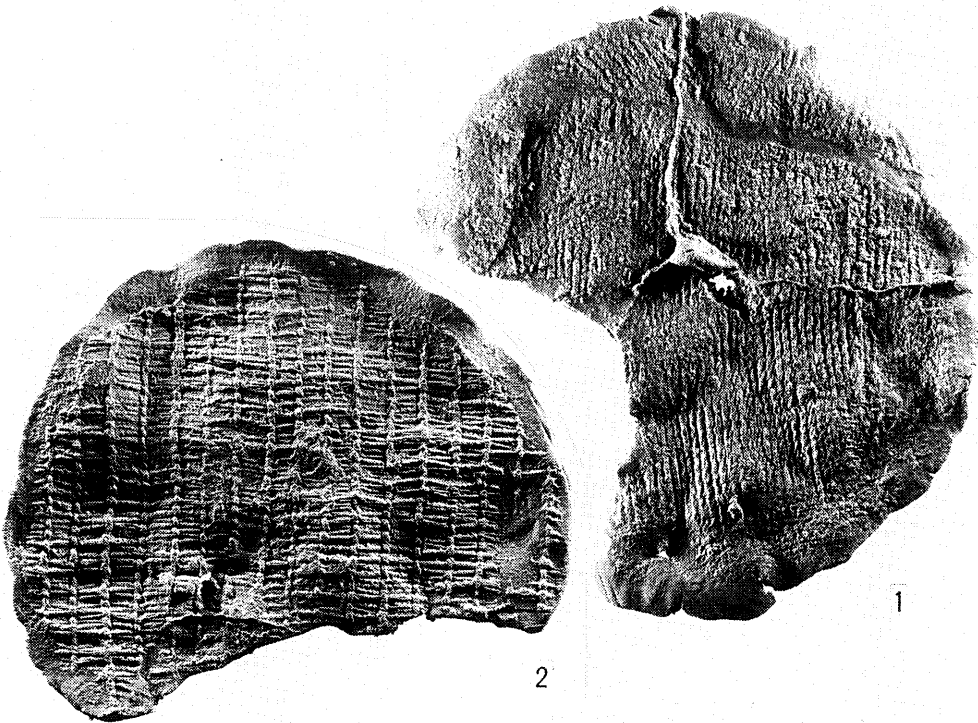


写真2 編布圧痕のモデリング陽像 (2分の1)

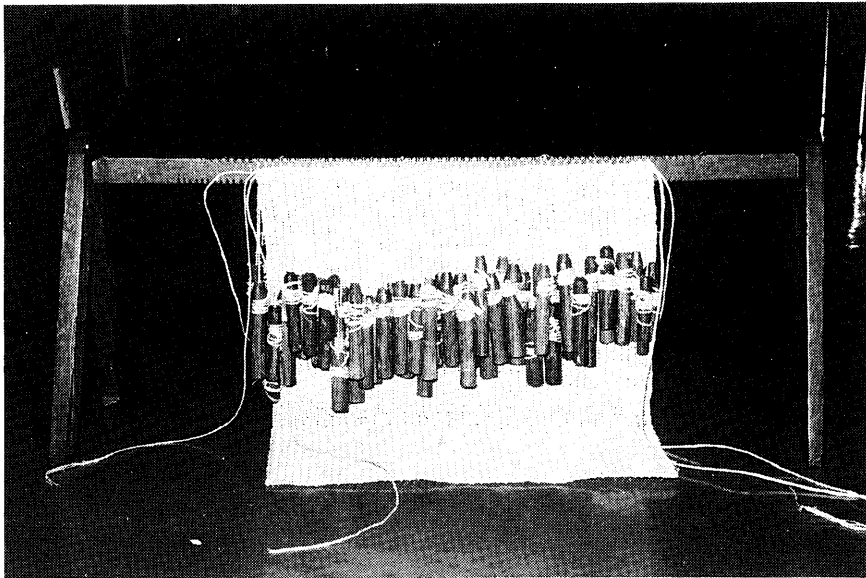


写真3 編布編み機 (新潟県十日町市博物館蔵)

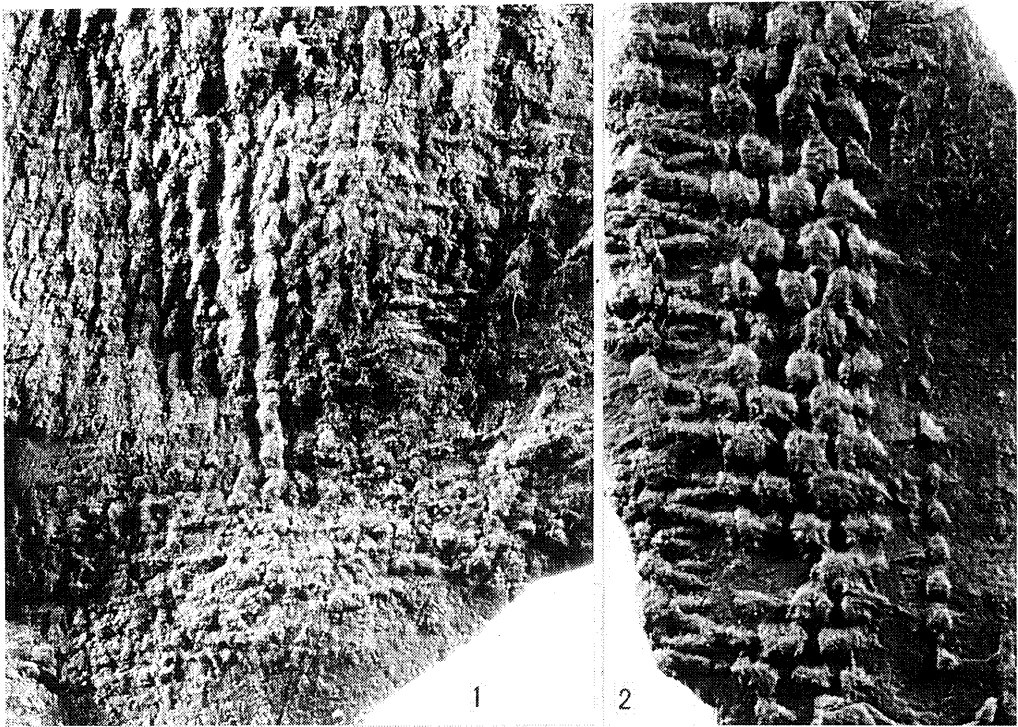
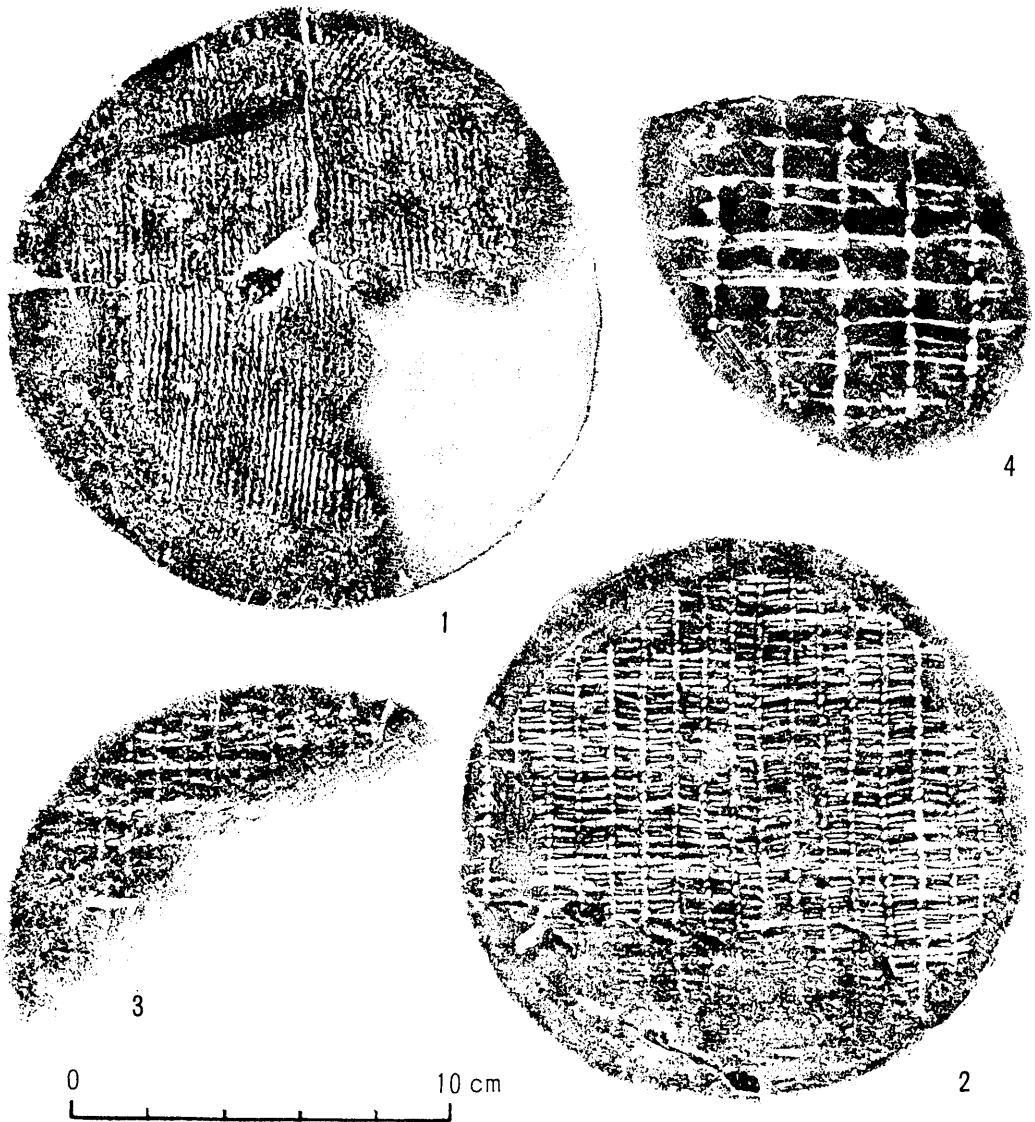


写真4 編布圧痕モデリング陽像拡大写真 (2倍)

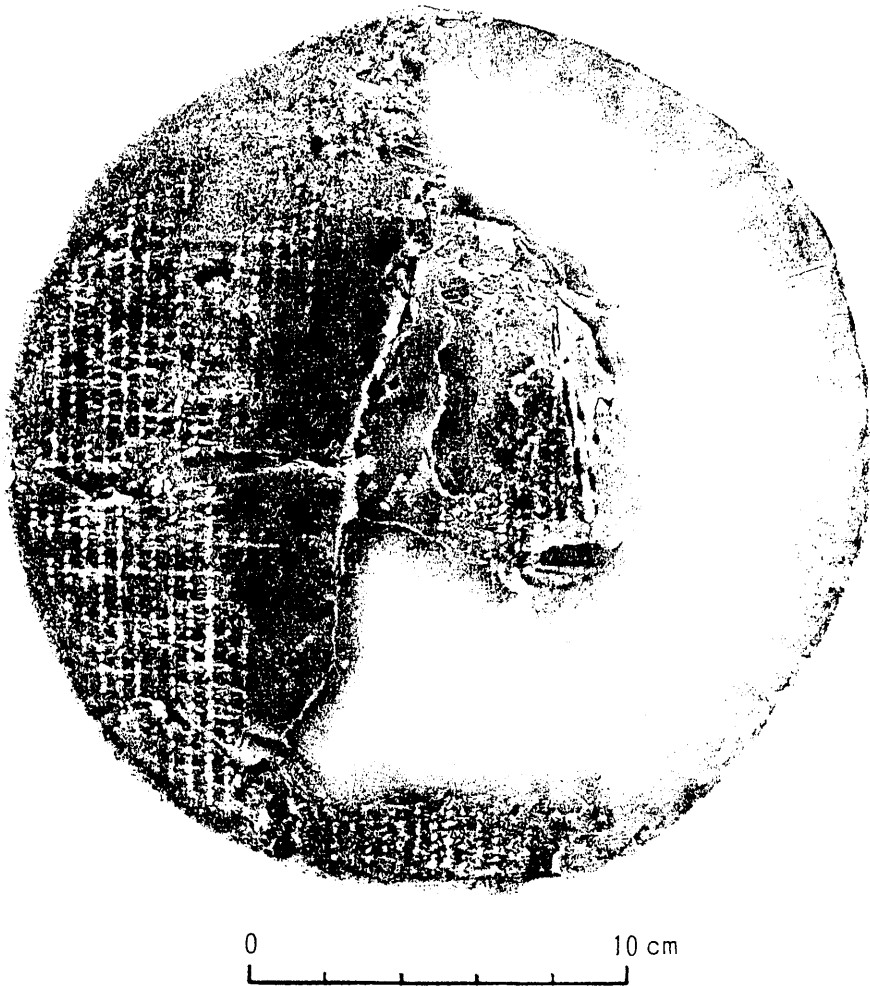


第4図 編布圧痕拓影1（1～3）とスタグレ状圧痕拓影（4）

比較によって、編布圧痕である可能性はきわめて高く、かねてより注目していたのである。

III. 編織文の組織

1994年9月に河北省文物研究所において調査させて頂いた、磁山遺跡出土の編織文付きの土器は6点である。そのうちの5点は編布圧痕であり、1点はスタグレ状圧痕であった。また編布圧痕のなかには疑似平織ともいべき組織がみられ、きわめて注目される。次にそれらの検討

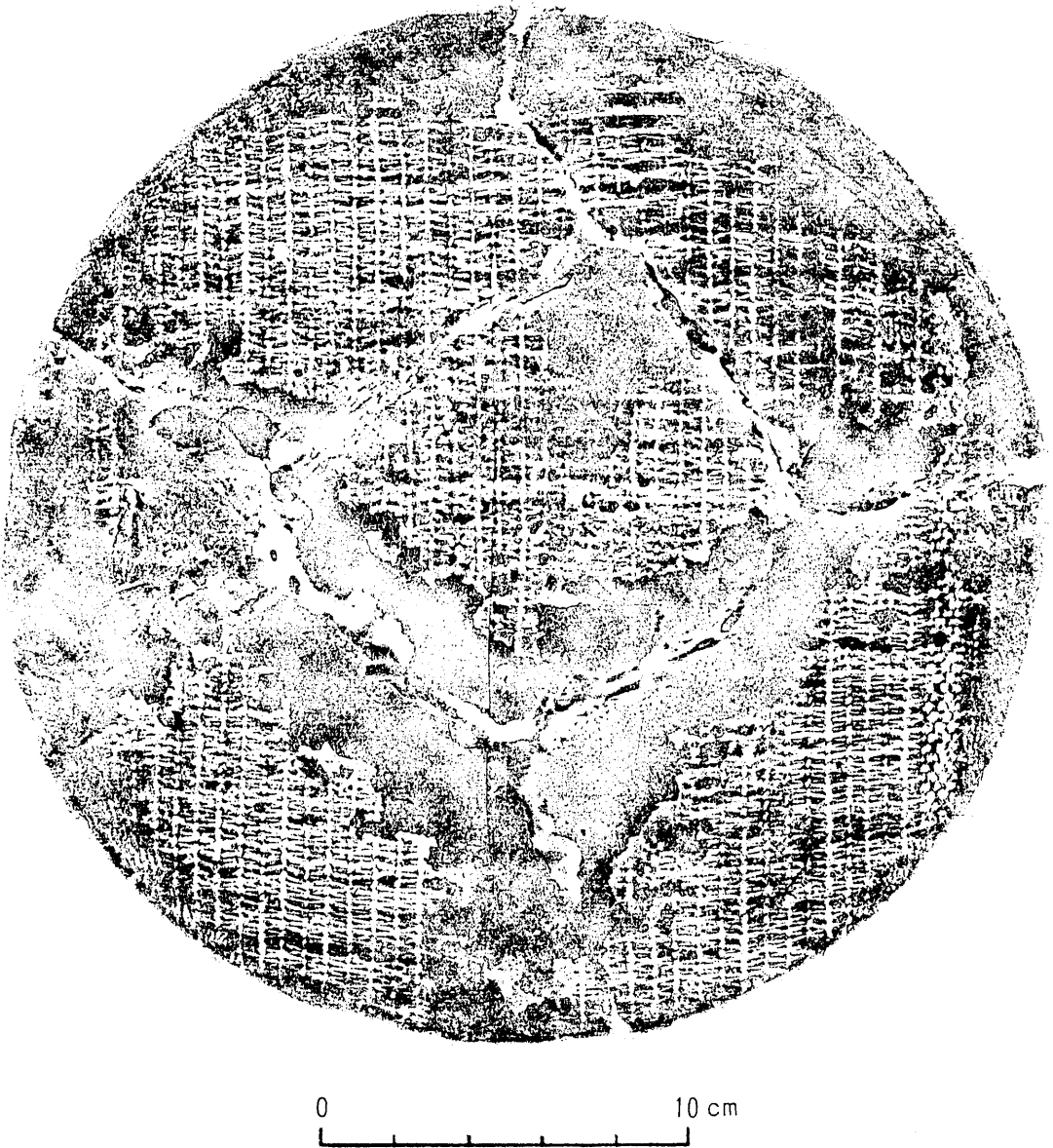


第5図 編布圧痕拓影2

結果を記す。なお計測に際してタテ糸の間隔はその中心間の距離、ヨコ糸の間隔は節のタテ方向の長さで記す。ただしタテ糸を1本置きにずらしてヨコ糸を2本ずつ編んでいる場合は、その2分の1とする。また前後一対の錘を交差させて編むのが編布の特徴であるが(写真3)、その交差方向は節の傾きとして記す。なお交差しない場合がみられ、それを疑似平織とよぶこととする。

資料1：編布圧痕(第4図1, 写真2-1, 同4-1)

直径15.8 cmの円形底部で、約5分の1を欠く。一見して密接して回転施文された撚糸文を思わせるが、拡大写真(写真4-1)にみられるようにタテ糸のはずれた部分にヨコ糸を明確に確認することができる。タテ糸は51本みられその間隔は3.3 mmで細密である。ヨコ糸は正確に数えることはできないが節の数から40本以上あったとみられ、その間隔は3.3 mmである。



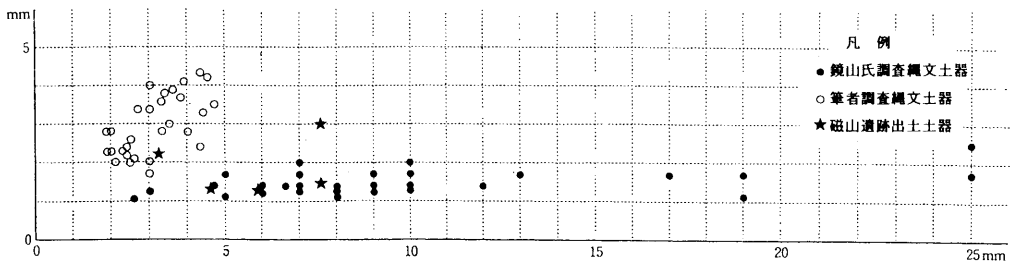
第6図 編布圧痕拓影3

資料2：編布圧痕（第4図2，写真2-2）

直径15.3 cmの円形底部で、約4分の1を欠く。タテ糸は17本みられその間隔は8.2 mm，ヨコ糸は約40本みられその間隔は1.5 mmである。またヨコ糸はZ字撚りである。なおその編み方はタテ糸を1本置きにずらしてヨコ糸を2本ずつ編む方法である。以下資料3～5も同じ編み方である。

第1表 編布圧痕計測値一覧表（単位：mm）

番号	タテ糸			ヨコ糸			挿図番号	写真番号
	簞の傾き	本数	間隔	撚り	本数	間隔		
1	右	51	3.3	?	40 ⁺	3.3	4-1	2-1,4-1
2	左	17	7.5	Z	40	1.5	4-2	2-2
3	左	13	7.5	?	?	3.0	4-3	
4	左	17	4.7	?	?	1.4	5	
5	左	44	5.9	?	?	1.4	6	4-2



第7図 編布圧痕のタテ糸・ヨコ糸の間隔

資料3：編布圧痕（第4図3）

底部の小破片で、タテ糸は13本みられその間隔は7.5 mm、ヨコ糸は正確に数えることはできないが、その間隔は3.0 mmである。

資料4：編布圧痕（第5図）

直径23.0 cmの円形底部で、約2分の1を欠く。タテ糸は17本みられその間隔は4.7 mm、ヨコ糸は正確に数えることはできないが、その間隔は1.4 mmである。

資料5：編布圧痕（第6図、写真4-2）

直径29.4 cmの円形底部で、ほぼ完形である。タテ糸は44本みられその間隔は5.9 mm、ヨコ糸は正確に数えることはできないが、その間隔は1.4 mmである。なお本資料は拓影（第6図）の右下に、拡大写真（写真4-2）に示すような疑似平織が認められきわめて重要である。これは編布の基本的な編み方である前後の錘を交差させるもじり編みではなく、平行させたまま編んだものである。しかもその両側は典型的なもじり編みで挟まれており、疑似平織が編布のバリエーションであることを示している。

資料6：スタレ状圧痕（第4図4）

短径9.7、長径推定12.4 cmの楕円形底部で、ごく一部分を欠く。ヨコは間隔が広く、材も糸ではないため編布圧痕とは認められず、スタレ状圧痕（渡辺1976）とみなすべきである。

以上の検討結果は、次のように要約される。

1. 磁山遺跡の編織文には編布圧痕とスタレ状圧痕の2種類があり、前者が多いらしい。し

たがって字義とは別に、編織文とは筆者にとっては両者に共通する編み方であるもじり編みであると理解される。第2図に引用した5例の多くは編布圧痕であるが、1例（第2図1）のみはスグレ状圧痕である。

2. 編布圧痕には細密な編布と粗い編布の圧痕との2種類がある。後者が多い。両者はタテ糸の間隔5mmが目安である。また第3図2の拓影には5本の粗いタテ糸の右側に8本の細密なタテ糸が認められる。

3. 粗い編布の編み方は、すべてタテ糸を1本置きにずらしてヨコ糸を2本ずつ編む方法である。これは1本ずつ編むより密着度が高いことが理解されていたことを示している。

4. 編布のバリエーションとして、もじり編みに挟まれて疑似平織が認められる。これは第3図3の拓影にもみられ、細密なもじり編みと疑似平織とが数本ずつ交互に繰り返され、文様効果が推定される。しかしそれ以上に原始機織りへ発展するための中間形態として、きわめて注目されるのである。

IV. おわりに

最後に結びに代えて編布・平織の起源と伝播についての展望を記すことにする。

今回日本以外の編布資料を始めて直接確認することができた。しかもその年代は古く縄文時代早期並行期の中国早期新石器時代である。一方日本では縄文時代前期を上限とし（渡辺1992）、それよりさかのぼる資料は現時点ではない。そして中国では次の仰韶文化では機織りが登場して編布はみられなくなる。その機織りの技術は縄文時代晩期末になって日本へ伝播するのであり、その時間的落差は大きい。全般的な文化的状況に加えて機織り技術伝播速度の遅さを考慮すれば、磁山文化から縄文文化へ直接的に伝播したとは考えがたい。おそらくシベリアと想定される共通の起源地からそれぞれに分布し、中国では早くに編布から平織へと発展し、日本では平織の伝播後も現在に至るまで編布が平織と共存してきたと考えられる。

このような展望に立てば、機織りの発明は中国北部において磁山文化から仰韶文化にかけて行われた可能性がきわめて高い。その証明を行いうる資料として疑似平織の役割はきわめて大きい。初めは文様としてもじり編みのなかに登場したのかもしれないが、やがて独立するようになったと想定される。平織の圧痕、機織り機などの技術、さらに織維作物などの資料を検討し問題を深めていきたいと思う。

そのためには磁山遺跡の編布圧痕の全貌を調査することがきわめて重要である。そして仰韶文化の平織圧痕も改めて重要視されてくる。また韓国・シベリア、さらには新大陸における関連資料の出現が鶴首されるのである。

引用文献目録

- 安 志敏, 1985: 華北における早期新石器時代文化の黎明。三上次男博士喜寿記念論文集, 考古編, 3~14 頁。東京。
- 河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所, 1981: 河北武安磁山遺址。考古, 1981-3。北京。
- 邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班, 1977: 河北磁山新石器遺址試掘。考古, 1977-6。北京。
- 渡辺 誠, 1976: スグレ状圧痕の研究。物質文化, 26, 1~23 頁。東京。
- , 1992: 編布の変遷。衣生活と民具, 7~23 頁。東京。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては, 次の方々の御指導と御協力によるところが大きい。末尾ながら御氏名を明記して深謝の意を表する次第である (敬称略)。

任式楠・馮浩璋・白雲翔 (中国社会科学院), 高建強 (河北省文物研究所)・熊海堂 (南京大学)。